

薬害を学び再発を防止するための教育に関する検討会 資料

「薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築」研究報告

2019年3月26日

研究代表者 藤吉圭二

(追手門学院大学)

本研究は、2010年4月に「薬害肝炎事件の検証及び再発防止のための医薬品行政のあり方検討委員会」による、「すべての国民に対する医薬品教育を推進するとともに、二度と薬害を起こさないという行政・企業を含めた医薬関係者の意識改革に役立ち、幅広く社会の認識を高めるため、薬害に関する資料の収集、公開等を恒常的に行う仕組み（いわゆる薬害研究資料館など）を設立すべきである」との指摘を受けて用意された科学研究費によって組織され推進されてきたものである。2018年度における本研究の進捗についてご報告したい。本来なら研究代表者が出席のうえ直截ご報告すべきところ、海外出張中のため書面による報告にてご容赦いただきたい。

今年度は、(1) 研究協力者・島津良子氏(奈良女子大学)を班長とする文書資料調査班、および(2) 研究協力者・佐藤哲彦氏(関西学院大学)を班長とする薬害被害者インタビュー映像調査班を中心として研究が推進された。この他に、(3) 薬害被害当事者への研究活動の報告とそのフィードバックに取り組んだ。以下、簡略ながら順にまとめていきたい。

(1) 文書資料調査班

大阪人権博物館(リバティおおさか・大阪市浪速区)に資料保管と作業スペースを提供していただき、島津班長のもと奈良女子大学、京都大学の大学院生を中心とする作業メンバーが調査・整理・目録作成にあたった。博物館に受け入れている福岡スモン資料はファイル(簿冊)レベルでの目録作成を終え、アイテム(一点)レベルでの目録作成を進めている。まだ一般公開できる状態にはないが、後述する被害者団体での報告会では回覧に供し、どのような資料がどのような観点から貴重なのかを具体的に説明する際に有効な資料となっている。この目録により薬害資料を保管し活用するとはどのようなことかに関するイメージを被害者の方々に具体的に持っていただけるようになっている。

また、文書資料班では本研究班と日本アーカイブズ学会との共催による研究集会「薬害

アーカイブズ：現状と課題」(2018年11月17日(土)大阪人権博物館にて)において調査の現状を報告し、研究者のみならず被害当事者の方々とも意見交換する機会をもった。

(参照サイト：<http://www.jsas.info/modules/news/article.php?storyid=327>)

(2) 薬害被害者インタビュー映像調査班

佐藤班長のもと班長の所属する関西学院大学の大学院生を作業メンバーとして、インタビュー映像の研究手法の検討およびインタビューのSCRIPT(文字起こし)の作成を進めた。SCRIPTは、すでに厚労省より提供されているものに特殊な記号を付与したりして発話分析(言いよどみや強くなったり早口になったりする発言に符号を付し、発言内容と発話の調子の関連づけによって、より深い分析を可能とする手法)が可能となるようにした。また厚労省により別途進められている被害者インタビュー映像の撮影に佐藤班長が出向き、より有効な映像撮影についても検討した。

(3) 薬害被害当事者への研究活動報告会

主として薬害肝炎の被害者団体、弁護団を中心に、時間と場所を提供していただいたところに出向き、研究活動の現状と見通しについて報告し、フィードバックを受ける取組みを重ねた。具体的には、この秋から冬にかけて、東京、東北、名古屋の肝炎団体の事務所を訪問して当事者、弁護士みなさんに活動内容をご報告し、出された疑問などにお答えするとともに資料の保存と活用について意見交換を実施した。

これまで研究班は、薬被連の世話人会での活動報告はしてきたが、今年度に入り個別の当事者団体に直接出向いて報告する機会を得たことにより、資料保存の意義をお伝えする一方、資料の活用に関する疑問や不安などを解消していただく一助とすることもでき、極めて有意義な活動になったと受け止めている。今後もこのような活動は必要と考えており、ひきつづき取り組んでいきたい。